

岐阜県農業技術センターニュース No.22

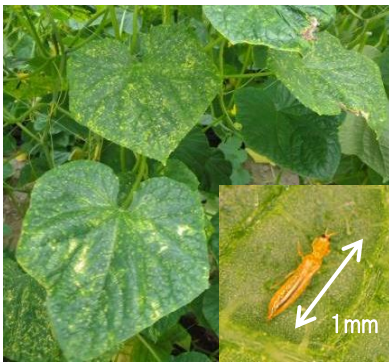
アザミウマの総合的防除技術の開発に向けて

(環境部・生物機能研究部)

県内のキュウリ産地では、ミナミキイロアザミウマが媒介するウイルスにより、キュウリ黄化えそ病が問題となっています。本病害を抑えるには、媒介者であるアザミウマを「施設内に入れない、施設内で増やさない、施設外に出さない」ことが重要です。しかし、アザミウマは非常に小さく、殺虫剤に対する抵抗性も懸念されています。

当センターでは、視覚阻害を利用した赤色ネットによる侵入対策を研究するとともに、各種殺虫剤に対する感受性や防除履歴を検討し、抵抗性を発達させない防除体系を構築していきます。

また、化学農薬に依存しない昆虫寄生性糸状菌を用いた新しい生物農薬の開発も行っていますので、これら技術を組合わせた総合的防除技術の開発を目指します。キュウリ黄化えそ病対策は現場からの要望が強く、関係機関が連携した対策チームを発足しており、本研究の成果は対策チームを通して速やかに普及させます。



キュウリ黄化えそ病と
ミナミキイロアザミウマ



アザミウマの侵入を抑制する赤色ネット



昆虫寄生性糸状菌

ひとくちサイズで皮をむかずに食べられる

新商品「ベビーパーシモン」(野菜・果樹部)

「平核無(ひらたねなし)」の小果変異系統「突(とつ)核無」を材料とし、手軽に食べることができ、カキの新商品開発を産学官共同研究(農水省実用技術開発事業)で実施しています。

種子は無く30g程度と一口サイズの大きさで、果皮を酵素で分解して取除き、容器に入れて手頃な価格で提供することで、カジュアル感覚でつまんで食べられる果物消費の新しいスタイルを提唱する技術開発を進めています。

当センターでは、「富有」などの既存品種の5倍以上の収穫果数を目指して、ポット栽培で高品質で安定的に栽培するため、栽培技術のマニュアル化に取り組んでいます。



突核無の大きさ



酵素で皮をむいた果実



ポット栽培の状況

麦茶用大麦栽培への取組みを支援

(作物部)

平成24年産から麦茶に適した大麦品種の栽培が始まりました。これまでも大麦栽培は行われていましたが、全て主食用品種でした。麦茶用品種は品種特性や求められる品質が主食用とは異なるため、栽培法の見直しが喫緊の課題です。

そこで平成23年播種から、収量増加とたんぱく質含量の向上に向けた播種量と追肥方法を検討しています。

今年度の試験結果から、施肥量の増加を産地の栽培暦に取り入れていただきました。

今後も試験結果を積み重ねることで、生産者と実需者の双方が納得できる栽培方法の確立に繋げていきます。



大麦(10月下旬播種)の生育状況

※手前から「ミノリムギ」「カシマゴール」「さやかぜ」播種1カ月で葉色の違いが出ている

微生物農薬「ハスモンキラー」の現地実証試験を実施

(生物機能研究部)

当センターと県内企業との共同研究により製品化され、平成24年3月に農薬登録認可されたハスモンヨトウに対する微生物農薬「ハスモンキラー」が、来年度より本格的に販売される予定です。

そこで、農業経営課および関係農業普及課と連携して、ダイズ、エダマメおよびイチゴの3品目について、普及に向けた現地実証試験を実施しました。

ハスモンヨトウの発生は例年より少なめでしたが、防除効果は高く、老齢幼虫にも効果が認められました。今後も、効果を活かせる使用方法について現地と連携しながら検討していきます。



試験結果報告会の様子(西濃地域)



感染死した老齢幼虫



生存幼虫数の調査

日系ブラジル人の研修受け入れで国際交流！

農水省中南米日系農業者連携交流委託事業で、日系ブラジル人のセルジオさんが10月30日から2週間、技術研修に来られました。本国では、果樹を中心に農協で営農指導員のような仕事をされています。研修では、カキの病害対策や選果機について調査され、当センターの研究者も調査研究に協力して、交流を深めました。



☆☆☆平成24年度成果検討会を開催します☆☆☆

日時：平成25年2月22日(金) 13時30分～

場所：農業技術センター講堂

※詳細はホームページに掲載いたします。是非ご覧ください。

岐阜県農業技術センター

〒501-1152 岐阜市又丸729-1

Tel 058(239)3131

<http://www.cc.rd.pref.gifu.jp/g-agri/index.html>

南濃試験地

〒503-0651 海津市平原1165

Tel 0584(53)0175

池田試験地

〒503-2407 揖斐郡池田町般若畑631-11 Tel 0585(45)3837